

第 34 回日本保健医療行動科学会学術大会のご案内

私たちの五つの「こだわり」～枠を越えて、そして原点を回帰して～

第 34 回大会長 梓川 一（東大阪大学）

このたびの奈良大会に向けて、実行委員会が大切にしている五つの「こだわり」があります。第一に、「当事者」というテーマです。第 34 回大会のテーマは、勇気をもって「当事者」を掲げました。実行委員会では、学術大会の準備の前段階から、この「当事者」というテーマ・概念・意味するところについて徹底して検討・研究を重ねました。「当事者」という言葉がもつイメージは、ややもすると誤解されるおそれがあります。例えば、社会福祉的な課題を抱えている人を理解するための一表現にも使われます。ここには援助する側と援助される側の区分や溝ができたりして、ノーマルな考え方を排除する方向へ導く傾向もあります。

私たちは広く当事者を捉えていきたいのです。「いったい当事者とは誰なのか」あるいは「すべての人が当事者ではないか」という本質を自問することから出発して、ノーマルな思考と理念をもって、この「当事者」というテーマに果敢にチャレンジをして、皆さんとともに原点に立ち返りたいのです。

第二に、「アートの演出」です。プログラムは能演から始まります。私もあまりわかっていませんでしたが、このたびの能も、現世の世界と死後の世界をつないでくれる語りが出されます。死後の世界から我々に伝えてくれる語りにも物語があるので。当日は、私も、能の世界観から、当事者という独自のナラティブを感じさせてもらつつもりです。

第三に、「つながり」です。第一日目のシンポジウムから全体テーマへのつながりとその方法論についても、実行委員会では練りに練りました。絢爛たる中にもオシャレさまでも併せもつ能楽ホールで、シンポジウムは開催されまして、当事者をともに考えあう・感じあうことを皆さんとともに過ごす時間と空間へ展開していくでしょう。そしてこの第一日目で浮かびあがってきた「考えるヒント」をもとに、第二日目のワークショップにつなげていこうというわけです。ワークショップでは、それぞれのグループで語りあって下さい。ふだんの生活ではついつい躊躇ってしまうような・・・気持ちや心情を表出しあい、お互いが仲間という安心した心をもてるのがいいですね。そしてさらに、それらを皆さん全体で共有し、わからあいたいのです。「どのようになるか」「どこに行き着くか」さえもわからないからこそ、魅力とチャレンジングな楽しみを感じます。

懇親会にもこだわりがあります。ここでも、語りあう・わかちあう場づくりに加えて、第一日目と第二日目のつながりの場として、懇親会を捉えています。雰囲気や空間を大切にしようと、この会場に決めて、ユニークなプログラムを準備しています。お楽しみ下さい。

第四に、「奈良」です。特別講演は、奈良で障害者や難病者の就労の場を創り出して来られた山内氏にお願いしました。奈良という地において、どのように福祉の場を創設するきっかけをつかみ、そこからともに生きるという共生空間をどのように創り出していったのか。当事者が生きていくとは、どういうことなのか。こうした取り組みの内容とプロセスについて、奈良という地域性や歴史性も含めて、お話をさせて頂く予定です。

最後に、大会長としての基調講演は、きっと拙いものになるはずですが、人と人がささえあうことによって、人は安心して語りあえるのではないかと、語りあえるのではないかと。安心して語りあえる関係性とは何であるのか。人間はどのように変容を遂げていくのか。これらを私の拙い研究と、私の人生経験のある場面の中からお話をします。市民の方々にも多数お越し頂きたいことから、学術的な講演の枠を越えて、少しユニークな語りからお伝えしていきます。

皆さんは、以上の私たちの四つの「こだわり」には、その根底に流れている基盤のようなものがあることに気づかれたことでしょうか。ここに私たちの思いがあります。。「甕；能楽ホール」という幻想的な“空間”で、ゆったりとした“時間”の流れのなかで、ともに考えあう・感じあう“仲間”とともに、ぜひ奈良の地で大会の三日間をお過ごし下さい。そうです、五つ目の「こだわり」は、「三つの間」なのです。



（日本保健医療行動科学会ニュースレター第 98 号（2019.3.）より抜粋）